

松浦佐用媛石魂錄

後編

貳

6-60005

986.4
3-5



松浦佐用媛石魂録後編卷之二



東都 曲亭主人編次

第十三回

神明誠を監と烈女志と得たり

博多彌四郎が從僕等の不憶主の撃れし由と洩聞と駭怕甚本所へ歸りて且ハ
 瀬川が宿所立寄り輝如此と報にければ若黨俊平打驚さくよと秋布は報知せ
 腰刀と掻奪てこれに續けと云も訖らず外面望く走出きハ来つる博多が從僕も喘々ぞ
 走りけ茲且一と俊平の撃きさりける彌四郎が亡散と板戸ふ乘して博多が從僕等も扛
 擔せ洩然として歸り来つそが儘與ふ扛居るを疾遅くと秋布の走よりつゝ衣搔遣
 て空き散ふ攜着よとむりり泣沈むと慰め難し俊平も手と又きつ頭を低く苦き胸
 の憂也膝也の關あらく共侶は禁難る涙に浩處は次房より咬きつゝ来る者あ
 り便是別人あらず博多倍太郎正延に重隔亮を開せと誤使かれハ許し給へと云つ上

座に坐を占む。秋布も俊平も勝ぬ涙は推拭ひつゝ。且其来意を請問ふ。正延親と更め
博多彌四郎素延事。御疑ひの一條あり。曩小鶴岡の神前へ。素延が進らせざる。征箭と一
通の願書あり。其願文。經高謀伏せずと云とも。瀬川采女を逮ふ。返させ給へ。と書たり
とい。不忠の至。言語同斷。逆賊を内より。主君を外に致せし事。呪詛調伏。異ならず是
より素延。今日誅戮せしめ訖ぬ。博多瀬川が妻子等の。御咎の一條。なほ重ねて御沙
汰あるべし。信と慎てとるべしもの也。但素延が亡骸。格別の義と以て。夜中竊ふとり
斂る事と免さる。香華院へ遣すと云。送葬の營なく。總便を述べた旨。御説よりつゞ傳達す。
此意を得られ候へ。いと嚴いぞ述りける。登時俊平頭と擡て。御説承り候ひぬ。見ら
るゝ如く秋布の。哀傷より果敢々々。稟命まうまべくもあらねば。僕従の卑きも。
憚と省す。代々疑惑のよしをまうさん。抑素延が願文。經高謀伏し誅伏して。吉次
と返させ給へ。と書さるよりの。某も面を小見候ひた。然ると謀伏せむと云とも。云云と
あらん事。心得がさく候。と云ふ正延頭と擡て。爾とも證據かけむ。申講あるべくも

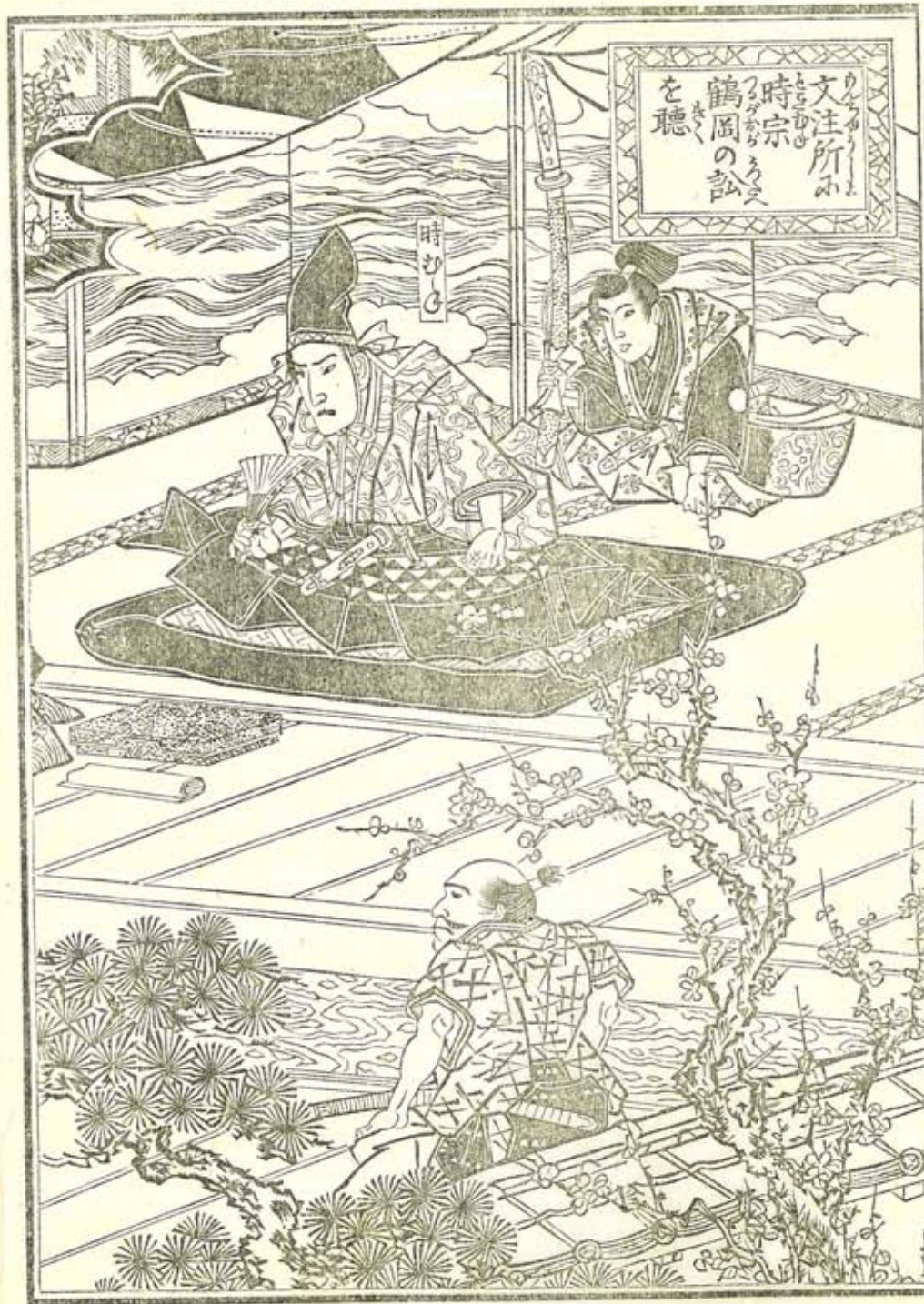
あらむ。素延不忠を存せぬ。我も亦よく是と知り。知り候と稟を由おた。是禍鬼
のあす所歟。吉次といひ。素延といひ。非命に終るのまらさ。其家長く絶ん事。時節到来是
非ふ及ばず。俊平の鰥角より。おまは仕く恩義も深う。主の後室と。補佐の任。和殿あらて
誰やいある。主家の難を引受く。亡人々の冤枉と。雪んとおまあらま。けき。某とても
親族の縁坐より。御目前と。憚り奉る。籠居るべし。立歸り候。是等の事も。御意と
得むやと思ふ。かされば。我身容られず。いふ。おま。我後と。憐む。暇あらんや。往來不通
なるべたれ。此義も心得るべし。尤も罷らんと云う。大刀を引提。身と起せば。俊
平も秋布も承りぬ。と計。生平の親。死中房も。輝更。奉り。頼と。づ。た。目。送り
ける。且。俊平。秋布。打對ひ。何と。思召。左。右。に。心。得。難。た。夜。御
願文の一義。雖不の二字と書かえ。かん。爹。君。と。罪。お。せ。鼠。川。長。城。野。が。徒。歟。恨
る者の所爲。よこそ。云。秋布。目。と。押。拭。ひ。さ。ま。ば。ど。よ。其。事。お。熱。思。ひ。回。ら。ま。う。と
て。や。ら。い。幼。稚。より。書。讀。む。事。と。好。み。つ。歌。多。く。詠。ら。る。人。の。討。の。鬱。悒。ま。て。筆。把

る事も多ふし。そが中ふ過つる歳。彼鼠川加二郎が。いと無禮かりりを懲らさんと。渠が
 冠弱不貝ふる。比興く讀い當坐の一歌東路乃多度迺瑞籬名背你底愛瀾詩神乃行惱鴨
 萬葉假名小書倣し。る。紙扇と彼人小取せしより。恨を舍ミ宛と締びて。長城野兵太と相譚
 つ。我君小聞えあげ。送ふ才と戦せし。其折小彼人々の。いひがひもあくうち負。贖
 罪を蒙る。此鎌倉を遣まし。いよゝます。怒讐の思ひとな。小動の磯邊隠
 に吾所夫を。狙撃し。も歌の科加。以。父大人の。願文と偽筆。竊小罪小墜せし。も。彼人々
 の所爲。よやあらん。縁故と推を時。鈍や。且ら。賢才どちて。い。でもあるべ。人の非と
 誅誇つ。其人。贈る。あ。り。親かりし。憎し。人。思ひ。なん。神も。照放。給。す。バ。重ね
 ぐ。憂事。此身。ひとつ。聚合。ん。や。か。ま。バ。良人。と。喪。し。も。又。父。大人。の。罪。か。い。ま。し。も。
 生才。學。小。誇。る。る。我。身。の。咎。である。う。う。か。う。悟。ら。む。バ。生。か。が。ら。天。狗。道。ふ。も。墮。ぬ。べ。た。此
 身の。罪。あ。そ。いと。深。け。き。赤。石。の。神。の。冥。罰。と。受。こ。も。よ。一。生。涯。歌。と。バ。ま。ま。書。も。視。悔
 の。八。千。過。百。千。と。び。吾。う。ら。ま。が。身。と。限。み。て。も。返。す。よ。か。死。天。の。行。親。と。良。人。と。先。ど。て。

いうで。存命。侍。ら。ん。や。ど。の。口。説。は。打。泣。く。護。身。囊。の。組。紐。の。斐。よ。素。る。婦。女。子。の。方。寸。
 刃。を。見。と。抜。け。け。既。は。自。害。と。見。え。し。う。バ。俊。平。の。吐。噎。と。む。う。り。透。さ。を。楚。と。推。禁。め。こ
 の。御。心。や。亂。ま。ん。家。の。難。己。と。謎。く。自。ら。罪。か。ひ。給。ふ。事。人。の。及。バ。ぬ。よ。あ。ま。ど。も。御。身。刃
 は。伏。し。給。ひ。難。う。又。彼。讐。と。撃。べ。た。伶。俐。け。き。ど。も。有。素。の。婦。人。心。と。鎮。め。給。へ。う。と。頻。し。
 諫。め。つ。獎。し。つ。漸。く。は。拿。放。ま。刃。を。鞋。に。納。ま。し。扱。ひ。死。ぬ。る。も。死。き。を。や。と。て。身。と。投。簡。く。ぞ。泣
 ふ。ける。有。爾。程。は。俊。平。の。其。實。素。延。の。亡。骸。と。葬。ら。ん。と。く。准。備。と。し。つ。博。多。瀬。川。兩。家。の。奴
 隸。は。柩。に。代。さ。る。輪。子。と。竊。に。擡。出。さ。し。つ。其。身。も。共。に。香。華。院。に。送。り。ゆ。た。て。潛。や。う。に。經。と
 讀。せ。更。關。る。比。并。果。て。僉。共。侶。は。宿。所。に。歸。る。は。秋。布。が。在。ら。ざ。き。バ。あ。い。い。う。よ。と。驚。き。く。
 彼此。と。索。る。程。ふ。春。の。夜。あ。れ。バ。え。や。曉。さ。り。御。答。を。被。り。籠。居。の。折。あ。ま。ま。白。晝。の。索。も。あ
 る。り。ま。す。夜。毎。く。ふ。人。を。出。し。て。其。身。も。共。に。か。い。る。く。或。は。川。筋。鎌。倉。の。端。山。か。ど。水。浸。經
 死。と。心。よ。う。け。く。彼。此。と。か。く。索。る。と。既。は。七。日。に。及。べ。ど。も。其。亡。骸。ど。も。見。る。よ。か。け。れ。バ。心
 の。憂。や。る。方。も。な。し。い。う。あ。れ。バ。斯。迄。は。執。念。深。禍。鬼。の。實。縁。く。我。の。物。と。思。ひ。を。る。ぞ。や。主。と

博多大人の横死の仇と君との所行をまじりて腕を離れも理をまじりて後室さまに。おれど異也。彌ふに憂ふ堪らね。自殺せんと給ひてを漸く諫め禁めしうども。猶死鬼に勾引きて。淵田小波を給ひて歎か。かくて頼む主もあらず。速に追腹切。思義と泉下小報せんものを。思ひ詰めつ坐と占。既刀小手とりけり。忽地小思ひうへせ。主の仇人のあは一箇皇土の内とよも去ら。いうで鼠川嘉二郎を撃米。後こそ。死生と其處に定ん。と尋思。いつ果敢なくも。其日を漸く消しけり。然バ又。執權北條時宗朝臣の博多素延を誅せし。り。七八日と過を程。一日内管領頼綱を召近づけ。予が年承頼川吉次と。不便の者小思ひ。渠が才を愛まば。さゆふより。曩に經高征伐の。軍監に任せし。其功をたふあらねども。這回博多彌四郎が不義の科。其婿ある吉次小溺愛し。る。僻吏ふよつて。かまきバ亦吉次も。縁坐の科。状いかでか脱ぎん。渠に既歸府の道中。動の磯の邊。鼠川嘉二郎等小撃れし。其間えありと。雖も妻子も恐むべ。死者ならず。逆世帯と官籍し。追放すべし。と仰る。頼綱にこまろのよしを。去るべし。とい思ひねども。嘉二郎が吏小拘ひ。

我身も咎と被し。先度と懲て遂小諫めず。承ぬと應つ。退き出んと。をる折ら。近習の侍走り来。鶴岡ある神主。神勅の注進あり。聞し召るべうも。と報る。時宗駭き。神勅あら。いとも畏し。吾自らよしと聞ん。使者をおかへ。參せよ。と回答。文注所に出給へ。頼綱等以下の近臣。當坐に扈從。あさりける。登時鶴岡の神主の使者。海邊甲。簀子の邊に。隣居し。頼綱に打對ひ。神主言上し。奉る。一條の神教あり。扱も兩三日已前より。當社時々。鳴動せし。神官。怕ま。群議を疑し。今朝も卯の時の半より。十二座の神樂を奏し。神應と清し。奉る。今茲九才。ありける。行童小。神の被らせ給ふと。覺く。踊揚り。狂ふ事半時計。猛し妙音と發。神官に告給。博多彌四郎素延の忠義。素朴の者。あり。鼠川嘉二郎が恨よつて。同類貫九郎と云。一個の下司。素延が願書と竊略せて。長城野兵太。文と易さ。雖不の兩字を増加し。其意炭雪の違ひ。以て来て。素延無實の罪。死した。素延が本文。經高。速小誅伏し。云云とありけるを。よくも思ひ回さ。罪を死者と害せし。神に怒り。人の恨めり。然ると又吉次が妻子を。罪を



丹波言書御覽卷之二

東京堂出版

忠貞の道修く廢きて。寃と伸る所なく。天災地妖屢々起して。上下交危るべし。
 先非を悔過と改めく。政道と正しくせむや。甚麼くと繰返しはく。いと爽やう小告させ
 給へば。神官等或は駭き。或は畏き。時と移さず是等の由と。そが儘注進一奉まり。願ふに萬
 機寛容の。政あうあたまわいけき。言上仍件の如し。と息吻あへを演るふあん。時宗主
 従打駭き。送目と目と注一つ。怕れて各々黙然さる。そが中時宗朝臣に。小膝と礮
 と打鳴らして。諤るかな凡夫の裁斷。予も亦鼠川嘉二郎等に謀られて。良臣を害せし過失神
 慮さこそ。と最も畏し。然れ共。當家の武運盡すて。不測に神の咎あり。いうてう讖悔せざる
 べた。かきまば瀬川吉次が。妻子連放の沙汰と止めて。宜く彼兩亡臣等が。後状いとよく憐
 むべし。平左衛門(頼綱)の予が名代に。速に社參し。幣帛と奉り。神責を謝し奉れ。予も
 明曉に參詣せん。使者もまづよく此意と得。神官等小報知せよ。と辭せし下知しつ
 ら。身の暇と賜ふふあん。使者に歡びて退き出。頼綱もろが儘。走宿所へ退きつ。行水一
 ら身を清め。三歳駒小鞭杖鳴ら。鶴岡へ參詣し。逆幣帛と進らせ。主君讖悔の情態と

黙禱しければ。行童に怒地鎮ま。衆皆安堵の思ひをさせり。有如此程。小時宗朝臣に。頃日
 家小籠居さる。博多倍太郎正延と召出。八幡宮の神勅の。奇瑞の由と聞え給へば。正延
 の駭然と。且怕き且歡び。頻り小膝の進むと覺す。時宗重ねて。吾吉次素延等が。家督の事
 と思へども。渠等小兒なきをいうまにせん。但吉次が妻秋布の。南殿ふも愛させ給へむ。宜
 く扶持し得さすべし。其餘の事云云と。詳に聞へ知して。立んとせしを呼留め。汝再び杖
 處小到らば。よく秋布に此意と傳へよ。心得さる歎。と又繰返し。説示し給ふふぞ。正延い
 よく歡びて。尤も御前と退出は。瀬川が宿所へ赴きけり。紫下某生再説。瀬川が若黨村
 澤俊平に。秋布が往方と索うねて。夜も通宵いねられず。思ひ疲れ目瞞々。其曉の夢の
 中。小それりと曉るよあま。兩三箇の奴隷を將。未明に復輿と昇しつ。鶴岡の社頭
 小到り。籠堂をさし聞く。秋布のいとさう。疲勞さる面色ふて。荒庭の上ふをり。こ
 什麼い。小と駭き。まづ其故と諮る。小秋布の箱頭と擡。いぬる夜こらに告せし。こ
 こ小籠て在り。うら。然こ便なく思ひまけ。鶴岡和殿いひつる如く不幸の上

不幸試累一^{いへ}家^の難^かの生^ま才^を學^ぶ博士^の態^をさる^こら^の科^ぞと思^ふ。此^の身^の恨^しく。自殺^の覺^け期^を
とあされども。太^く和^ま殿^は諫^められ^し。志^と得^果さ^む。あ^りとも父^大人^の冤^枉を雪^めす
バ。存^命註^{とも}其^の甲^斐ふ^一神^佛未^だ棄^給ひ^をバ。祈^る小^驗あ^らん^や。と思^ひ起^一つ親^良人^の
の忌^服の怕^まい有^らが^ら。逆^も己^が身^と費^ふ一^く死^ぬるに憚^ること^やある。鶴^岡ある大^神の
社^頭祈^念と疑^{さん}もの^と。深^念と一^つ走^り出^く。か^の宵^{より}一^く食^と斷^る。己^が親^の
の枉^冤。當^社願^書と奉^ま一^其支^{より}一^く發^りひ^けま^バ。倘^えら^うむ^一神^罰を受^べ
た罪^と犯^せ一^欺然^らむ^バ親^の枉^冤を解^諦させ給^へう^一。そ^を將^神の威^徳ふも^及バ^せ給^へ
ぬもの^{なら}バ。秋^布が露^の命^と。七^日の間^取ら^せ給^へと。丹^精と疑^らを程^ふ。社^壇折^々鳴^動
一^く神^樂の行^童大^神の被^せ給^ひ一^託宣^{あり}。其^故如此^くと。宮^奴の罵^駭ぐ^みぞ原^來
念^願驗^{あり}。空^一う^らす^と思^ふふも。いと憑^く一^く歡^く。い^うで宿^所へ歸^らん^とおも
へども身^の疲^勞さ^り。往^も得^着う^て道^路倒^る一^事の^{あり}も^やせんと。己^が身^がら^うは^固
ミ^く。か^は躑^躑踏^て在^るふ。さ^ても和^殿い^うま^一。こ^こは^こら^のが^とる^よ一^と。よ^く知^り

と索^米つる^や。知^らむ^バ准^備の驕^子さ^へ。并^一て得^米ま^らた^ふ。是^も不^測の更^まころと
云^ふ俊^平駭^敷一^く。世^をえ^や澆^季ふ^及ぶ^と。雖^も。月^日未^だ地^に墜^給ひ^を。こ^こふ^ます^一
神^國の靈^社の奇^特顯^き。然^る應^驗と得^{させ}給^ふも。是^深信^の致^を所^{。そ}ま^よい^あら^うで僕^の
の。おん^身の往^方を索^難さ^る。此^曉の夢^心。公^然さ^る一^箇の老^翁。枕^方立^在て。汝^の主^の
の秋^布が。往^方を索^らま^く致^さる^致。准^備の復^興と齋^一。と^く鶴^岡の社^頭は^起き籠^堂と
聞^へう^一。遅^くバ。愆^{あら}ん^む。と云^敷と思^へバ。夢^覺さ^り。こ^の平^更は^非と^と。形^の如^くは
計^ひつ^竊御^迎ふ^来と見^まバ。正^夢一^く果^て違^ひを^豫て^の憂^い堪^らね^く。淵^田ふ^や
扱^ミ給^ひ々^ん。繼^ぎて^や亡^給ひ^一。と思^ひま^けれ^バ。こ^こら^をバ。う^けても索^ざり^{ける}よ^こま^き
將^神の示^現ふ^よれ^り。いと憑^く候^{。と}告^るふ秋^市彌^感。一^く齊^一奇^異の思^ひと一^つ。復^興
興^ふ扶^乘られ^く。潛^び宿^所に歸^りま^けま^バ。俊^平の秋^布は^藥を薦^め粥^と覈^らせ^{。さ}ま^ま
く^一は^勸る^程。通^夜の疲^勞の稍^瘥。心^地清^々一^くあり^ふたり。活^處小^説使^と一^く博^多
倍^太郎^正延^{。瀬}川^が宿^所に^来臨^一。鶴^岡の神^勅。主^君の恩^命。素^延の罪^を赦^せ
多^倍太^郎正^延。瀬^川が宿^所に^来臨^一。鶴^岡の神^勅。主^君の恩^命。素^延の罪^を赦^せ

一後悔の絆の趣親族の子を頼りて博多氏の跡をしも立下さきんとある君命を詳ふ
 述傳へく。こまのミからむ又一條の恩命こそとひまをさき。瀬川博多の家督の更其養嗣
 の速ふ整ひ難た事もあるべし。倘秋布が宿願あらば。開届け得させんぞ。と仰らむ候。と
 告げふ歡ぶ秋布主従。鶴岡と君所の方と。彼方是方と伏拜む。感涙留めりねとりしを。且
 秋布の涙と歟め膝を進めり。正延ふ打對ひ累々し君の寵恩。生を牛馬に變るども報
 奉るに足らむや侍らん。就て一つの願ひあり。良人吉次が當の仇。彼鼠川嘉二郎の。尤やく逐
 電去されども。皇國の外はよも出づ。己らの幸なく。蠅々し死女子に生れ侍まども。和漢の史
 傳に載せらむ。勇婦烈女の多りる。よーや力の及ぶども。志やの劣るべし。願ふに親と
 良人の仇とる。鼠川嘉二郎を撃捕く。亡魂を祭慰め。さく爾后に養嗣の願ひを許させ給ひ
 ぬ。此上の御慈愛に侍るめる。此議を稟させ給へり。と云ふ。俊平も進み出く。言あら
 く候へども。僕の瀬川が譜筈。道考吉次。主二代の恩義は人どかりより。大刀抜く術も書
 籍讀む事も。聊諳く候ひ死。いうて今より秋布が。仇討の後見く。助劍く。宿念と果させ

む。バいろよ。主恩を返まよ。のあるべし。是僕が素懐。此義も合せ給へり。と。主従
 齊一庶幾へ。正延屢々領さく。適微妙くいひきり。憂樂共に道る。よかた。己れも一
 家の片隻かれ。面を起ま貞女の孝烈。いうて披露せざるべし。既より鶴岡の神慮は。稱
 ひよしもあま。主従宿志と遂ん事。今更に疑ふ可らむ。又後憑く候。と云ふ。歡ぶ秋布
 主従。神の冥助の深信の。應報も侍らん歟。併君の善政。解寡孤獨に至るまで。憐せ給ふ
 なる。慈悲と又其洪福を。鋒どもをべく。盾ともして。撃バ仇人と撃ざらんや。とさく。免許の
 御沙汰。伏奉るの。こと。と云ふ。正延領さく。其裁をべく。心得り。君の待不樂給ひ
 ん。尤や罷んと身と起ま。送迎も重疊續の。折理正し。死武夫が式臺して。ど別々たる。有右
 て。倍太郎正延も。戀く君所。歸り参りて。時宗朝臣。如此くと。秋布主従が願。まう。あ
 仇撃の更の趣。具に聞えあげり。時宗聞つ。含笑く。秋布は。是閨秀の才女。深窓に
 書を聞く。歌を詠む事。あど。榮女清少。も恥ざるべし。と。鋒と舞。大刀と撃る。武藝
 の上。心もと。又彼鼠川嘉二郎の。憎むても。憎む能ふ。大辟不赦の罪人。國中に。徇夫

一と搦捕せんとこそ思ふなき。かゝる秋布の萬里の逆旅に起るをも居あがりよ
 と復讐の志を遂ん事。一兩年と過べうらむ。然れ共渠が願ひと聽ざらんも亦勸懲に違
 ふに似たり其義の己れよく尋思して。後日の沙汰に及ぶべし。如此心得よ。と示させ給へ
 ば。正延の唯々として。懸る宿所へ退出けり。有然程に秋布の籠居と許され。世間廣くお
 りしう。日毎に香華院に参詣し。親と良人の菩提と吊ひ。且其墳墓と造作し。多くは佛
 事三昧に。長き春の日を消走ものか。仇討の願事。一日片時も忘る、事なく折々博多正
 延に。御沙汰奈何。と催促を。活處に北條上總介實政。西國より凱陣のよ。豫く其聞えあり。
 遂に肆月の初を及びて。實政鎌倉に還著し。時宗朝臣に見参を。此日在鎌倉の武士執權
 の家臣。御邸に聚合し。賀祝の饗饌あり。就中實政の御盃と賜し。祝儀の田樂と觀せし
 めらる。綵華と時宗の實政と近く招き。軍のやうと問給ふ。實政答申を。早春注
 進仕りき。經高が軍師牛淵九郎の飛蘭渡の若し盾籠りを。瀬川吉次が計策ふより。牛
 淵と欺引よせ。迺末の龍華よ。吉次是を撃捕訖ぬ。有然程に經高も己が居城に引籠る

と勢ひ既折けたり。某是を遠攻し。速に攻撃す。いうよとかれ。經高飛淵度の若と
 抜き。其翼と失へども。かほ千餘騎の賊兵あり。力戦ふとらん。は御方も士卒を多く
 撃れん。かゝれば敵の兵糧竭。進退其處に谷る時。一舉し。經高と虜にせんと。速慮を
 廻し。稻麻の如く聞せ。夜の篝火と焼曉し。又折々鼓と鳴り。て政蒐らんと。まる勢ひを
 敵に示し。駭し。とき。其自滅と俟程。一朝敵の城と遙に見る。早炊の烟竟に絶て。
 馬の嘶く聲もせむ。原采敵の饑めれ疾攻破き。と下知すれば。摠軍齊一鬨と發りて。早雄の
 若武者等。輕と歩し。塀と乘踏。暴直に攻著て。えや二の城門まで打破る。敵一人もあらざり
 けり。この什麼と。衆人采きて。彼此と見り。へ。二の城門の東の方。いと大きに脱穴あ
 り。原采早晚穴と穿ちて。彼處より落亡し。まづ其與と極めよ。とて。一兩人と容きて見せし
 一。大約に廿餘町。して。遙に城の背か。海邊に脱門あり。彼處に殊に切所。とて。成の兵
 と措ざりけき。賊徒こまよ。知て。かう長や。ある脱穴と。幾日。穿ふ。こ、ふ
 慮ひの足ら。捕逃せし。こ。朽し。けき。疾。其往方を。索よ。とて。八方へ。部。軍兵多

く出つ、樹を伐り草と刈拂ふまで隈もなく渉獵る程に。彼此は懸き居る賊兵夥生
拘て經高が往方と聞ふ。初め城と落し時皆散々ふかりり。經高の何地行々存亡
定りふらむといへり。是ふよりまづ生拘を誅戮して。九州は御知らる。骨相書ともて經高が
所在と穿鑿ふされども。絶て往方と知るよふけき。逆徒の城と破却して。かくる凱陣
任りぬ。悔らくは經高と討漏し候へども。九州既し靜謐に。公私の大幸此上あり。と最勇
ましく演説を。時宗はらく打聞て。總州這回の軍配の意外に鄙怯あり。彼賊の軍師と
聞え。牛淵九郎清繩の軍監瀬川吉次が計略に乗せられて。自ら首と贈るふ及びて。經高
怒地騰と冷して。落支度とまらふ。遠巻ふして日を送り。渠に數町の脱穴と穿せし。い
うよぞや。短兵急に攻蒐らば。斯方多く撃れんと思ふ。速應に然る事ながら。或は水攻。或は火
攻。方便と以て攻破らば。斯方と損ぜぬ城と抜く。軍術のいくともあるべし。然るを其識ふ
及む。矢種兵糧を費し。賊首經高と走らせし。抑誰が怨どや。四境一日も靜
からねば。時宗の一日も寢食と安うせむ。宵衣旰食。國の大吏を拘ひ。士卒を撃せ

いと。のミせられし。所云宋襄の仁に似。胡應ふこそ候へ。と憚る氣色も。なく戀しめ給
へば。實政いさく畏。重く陳むるよしもなく。遂に席も堪むや。ありなん。暇申し退
出。是より病痾は假托。長く出仕もせざりけ。實政の事。此下は話あり。且して。時
宗の御後方は侍りたる。博多倍太郎を見うへり。實政が這回の不覺。いひがひか。と思
ふふも。惜むべき者の。只瀬川采女吉次。渠實政に従ふ。始終彼處に在らん。必よく
實政と。諫め。經高と虜。まづべし。己は秋布が情義に感。吉次と召還せし。千應の一
失。臍を噬む。汝の望。己比及。秋布と俊平と。相具し。出仕せよ。と辭せし。聞え。志
し。又頼綱と招き近づけ。經高追捕の一條に。忽諸を可らむ。國中。下知を傳へ。捕捕
進らせ。武士の御家臣。ふささるべく。庶民からば賞錢と賜ふべし。賊罪ある者と云と
も。功よりて罪許さん。此義と。やぐ御知せよ。と遣る。隈なく政ち。此日の廳に果し
たり。

第十四回

逆旋の初厄使者の釋りる

かくく其詰旦博多倍太郎正延はかたばい たらう せいえん。秋布主従と相具あきふしゅじゆう とあひあひ。時刻を違へじこくをちがへを参りまゐらば。時宗此
よしと聞給きこひく。文注所もんちゆしよ御出おんいであり。秋布と近く召めきて。汝女流なんぢがらうの非力ひりき。試もて親良人の役やく襲
と願申ねがひまうを事神妙ことしんめう。是これより。仇討あだうち免許めんぎょの御教書おんきやうしょをふ下くださき。且かつ盤纏ばんぜんの爲ため。金二百兩かねにひゃくにやうを給
ふもの。従僕じゆうやく俊平しゆんぺいと心こころと合あひ。仇人かたを嘉二郎かじらうが所在ありかと索たづねく。討捕うちとつを歸かへり参まゐり。今いまより其期そのじと俟
ぞうぞうと。町寧ちやうねいふ仰渡おんたわさき。御書ごしょと二百金にひゃくかねと賜たまひふたれば。秋布あきふの歡たのしき。只ただ感涙かんだいふ咽
ぶの。世よふ有難ありがたき君恩きんおんの謝あやうびを聞きえあげて。速侍すみせうふ退出でしゅたり。此時このとき内管領うちくわんりやう頼綱たのづなの秋布あきふが
若黨わかつぐ村澤むらさわ俊平しゆんぺいと。速侍すみせうふ召登めいとうして。執權しつけんの仰おんせと傳つたへ。汝なんぢ主思しゅおんを思おもふが故ゆゑ。秋布あきふが仇討あだうちの供
は立たんど願ねがふ事殊勝ことしゆせうふ思おも召める。百折ひやくせつ千磨せんまの艱苦かんくふあふども。今の志こころざしと移うつさむ。主
と佐たすけ。本意ほんいを遂すげ。功こうより。恩賞おんせうあらん。又一條またいじょう別べつふ心得こころえさまべき。吏しあり。逆臣ぎやくしん平の經
高たかの城しろと棄逆きてぎやく電でんして。今いま往方かうへ定さだり。是これより。國中こくちゆうに拘かれて。追捕つうぱの御下知おんげち嚴重
。汝なんぢ主従しゅじゆう逆旅ぎやくりょの間ま。倘たう經高けいかうが所在ありかと。えやく注進ちゆうしん致いたさべ。則すなはち吉次きちじが生前せうぜんの素
懐くわいふ稱なづふ。莫大ばくたいの忠節ちゆうせつ。此事このことの餘吏よじある。秋布あきふの仰おんせ示しさき。汝なんぢまづよく此意このいと得

て。秋布あきふ不達ふたつをべ。等閑とうかんをか承うけと。と繰返くりかへ一つ。云渡いひわたせば。俊平しゆんぺい歡喜くわんぎ雀躍せつやくして。稟命れいめいを
申まうを折せ。秋布あきふの文注所もんちゆしよより退しりぞき。内管領うちくわんりやう君恩きんおんの歡たのびと速すみく。主従しゅじゆう共侶きよら。君所きんじよををべり
出いる時とき。正延せいえんの是これと送り。此日このひの首尾しゆびの辱かたじけなきと祝いわぎ。俊平しゆんぺいの又頼綱またたのづなふ傳達でんたつせられ。經高けいかう
追捕つうぱの御下知おんげちを。秋布あきふふ告つげよける。有然あるほど程ほど。秋布あきふの宿所しゆくじよへ歸かへらんと。思おもふやう。這年このとし
来南殿きなんてんの(時宗ときむねの母公ははこう前まへ集しゆふ見みへたり)御慈愛おんじあいと被かり。い。うで。仇討あだうち恩免おんめんの歡たのびを申まう
すべく。生死せいじ不定ふぢやうの旅たびふ。あれ。見参みさん。今いま生の辭別いせまべとも申まさめ。と。聽きく。南なんの御亭おんていふ
参まゐり。つ。執達しつたつの女房にようばうふ云いふ。云いふ。と。まう。え。ら。う。バ。南殿なんてん歡たのび給たまひ。邊近へんぢんく招まねく。不覺ふかく涙なみだぐ。ミ
あがら。漸しだく。宣のたまふやう。吉次きちじ素延すえん等らが。非命ひめいの事こと。最惜さいしやくむ。餘あまりあり。親おやと良人らうじんと。月つきの中ちゆう。中ちゆう。喪
ひぬる。你おぬの哀悼あいだう。今更いまさらふ云いふ。くも。非あむ。さ。ば。甚こゝろ孝烈かうれつの志こころざしを。還かへう。仇討あだうちの義ぎと聞きえあげ。
け。御免ごめんを蒙かかり。近日かぢぢは。首途かどてを。聞きけ。バ。餘波あまなみ惜しさ。限かぎりも。非あむ。只ただ。速すみふ。夙志しゆくしと。遂すく。歸
り。参まゐると。俟まちんの。其日そのひを。何時いつと。揣はかり。難がたに。留別りうべつの見参みさん。あ。れ。バ。寬あまや。う。は。打相譚うちあひらく。人ひととも。身
とも。慰なぐさめ。よ。と。て。御おん。盃さかずきと。給たまり。つ。是これより。後のちを。只ただ。四表よもや八表やちやうの物語ものがたり。長ながき。春はるの日ひも。け。ふ

バウリ短一とふん思ひ給ひ南殿の語次。又秋布ふ宣ふやう。そふさの風流の才闌。尋
出せる秀歌も多く。女博士とも云つべし。博識の人愈々まり。遭バ問んと思ひさる。二くどり
の疑惑あり。萬葉集。山のは。あぢむらさねぎ去ふれど。これの左夫思惠君。一在らねバ。
又あぢ集。あぢの住む渚沙の入江のごもり沼の。あかいたつり。みまひさし。あぢ
むら。又あぢのむら鳥とも詠り。此あぢと云もの。鬼の一種。鬼よりの形状ひさくよ
く群れ遊ぶものあるよしを。己まも知まり。然れ共何より。あぢと云。此名義をいへ
るものか。又伊勢物語。夜もあけバ狐。食ふくどりけの。まごき。鳴くせをやりつ
くかけバ。鶏と云とぞ。物ふの家鶏とも書り。この附會あるべし。催馬樂。にのとりかけ
ると鳴つと語へまバ。かけとの鶏のなく群。名づけたりと云説。あまども。今鶏の
啼くと聞く。かけるとの聞えむ。但くどかけのくごの腐。罵り云辭。腐儒。又くさ
れ女ふと云ふ同。といへる一説。誠。然あるべし。鶏とくけといふ支。おほ據あるべく
や。考あらバ置土産。説諦。疑ひと釋させてよと宣へバ。秋布差。る面色。よて。頼づた

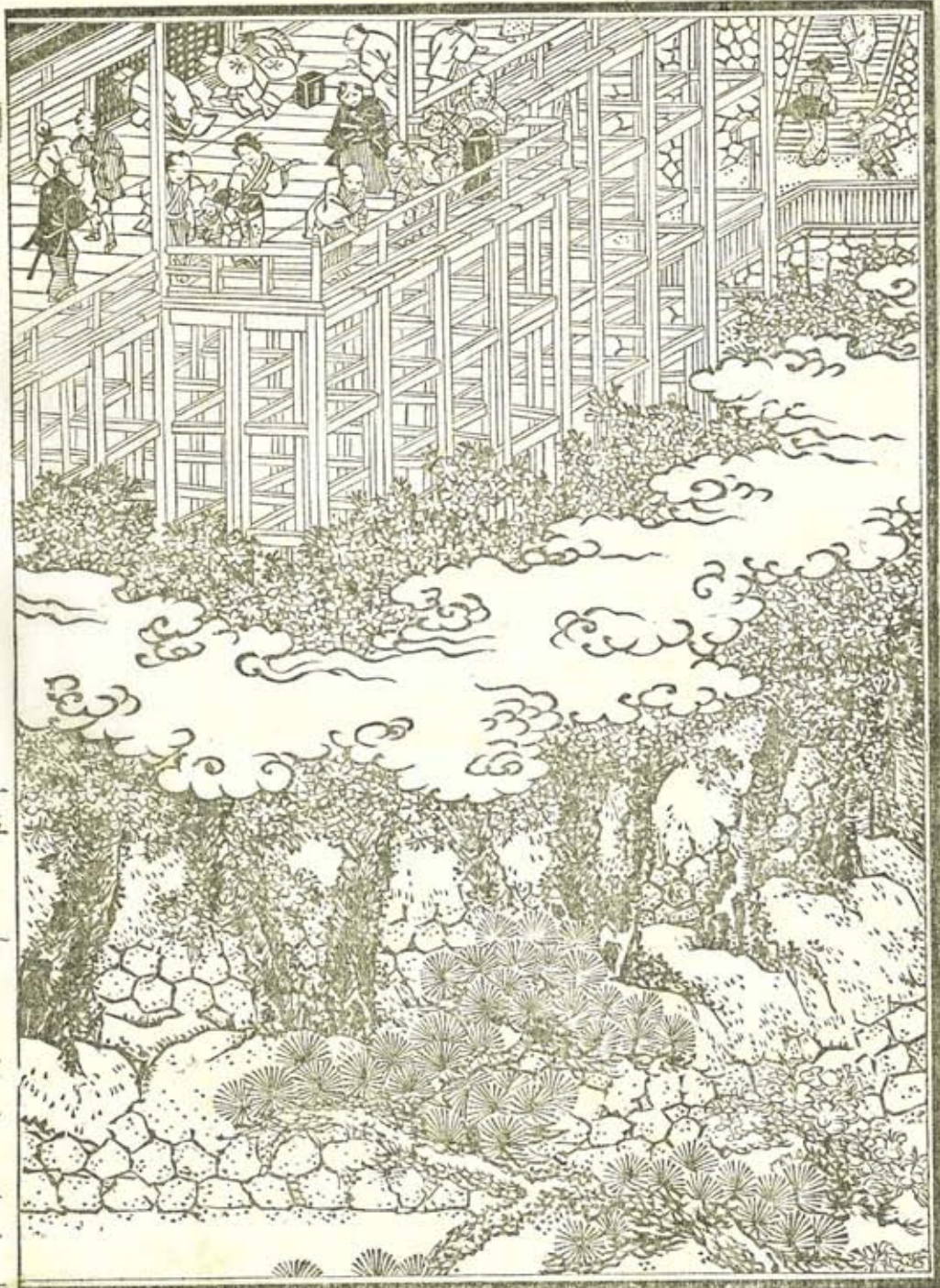
さる頭。擡げ。問せ給ふをかく申さバ。無禮なる。似て惶恐けれども。近層先非と悔。よあ
りて。一生涯歌をバ詠ま。問る。更と博士態。論をま。けれ。と誓ひ侍り。其故の親と良
人。非命ふ世を遺侍り。始と推せバ博士態。さる。己ら。愆より起。侍り。其事。
今詳ふ申あぐるも益。あぐるべし。況目今問せ給ふ。あぢ。かけの名義の起原。つや。
思ひがけされバ。考。事も侍らむ。旅宿の折博物家。値過る事も侍り。ふバ。よく問質。
歸府の日の。御土産。こころ仕らめ。けふ。許させ給へ。と。おる。推辭申せ。南殿
領。彼知ると知ると。知らざると知らむと。を。聖人賢者の心。なり。你秀才あり
と云ども。知らざる事。の。あさ。い。あ。知らぬ事。と知らむといへる。却。いと愛。又
只此義の。こ。あ。婦女子の博士態。と。悔。今よりさる所行。を。せま。た。もの。ど。誓ひ
い。是も亦愛。さ。事。餘り。婦女子の才闌。さる。淫奔。からぬ者。稀。紫女。清少。和泉式
部。小野小町の。儔。と見。も。貞操。の方。の。殊。り。你。自。非。と知。云。云。と。思。ひ。訣。い。人
の。及。バ。ぬ。事。ふ。あ。ん。現。婦女子。よ。て。仇。と。撃。んと。欲。さ。る。男。子。の。情。態。文。と。祛。武。ふ。依。ら。む。

ば。よく宿望を果さんや。かまれば你のさのふ迄の。秋布のあらすく。變成男子ありけ
 る者。と。風流の疑問を云出し。思ひざりける吾身の。愆心裏恥し。死事。は。あ。ん。か。う。い。ん。が。
 世尊。は。對。し。く。法。門。か。く。る。不。似。さ。ま。じ。も。曩。は。何。が。の。僧。正。の。隨。筆。あ。る。佛。書。と。借。抄。し。く。法。
 華。經。の。提。婆。品。八。歲。龍。女。成。佛。の。一。段。を。開。せ。し。ふ。今。の。你。の。心。操。ふ。思。ひ。合。え。る。義。あ。る。ん。ぞ。
 を。い。う。ふ。ぞ。と。推。し。見。よ。諸。法。實。相。の。法。華。な。れ。ば。男。も。實。相。女。も。實。相。非。男。非。女。も。實。相。也。さ。ま。じ。
 ば。こ。そ。經。文。は。若。有。聞。法。者。無。一。不。成。佛。也。も。説。き。一。稱。南。無。佛。皆。已。成。佛。道。也。も。説。給。へ。ば。
 龍。女。の。龍。女。の。儘。ふ。し。て。成。佛。を。き。該。あ。る。よ。變。成。男。子。と。あ。る。時。は。是。男。子。の。成。佛。ふ。く。女。
 人。の。成。佛。ふ。非。ざ。る。こ。此。所。ふ。異。釋。あり。理。趣。釋。經。ふ。男。女。の。梵。語。の。出。さ。る。を。按。ず。る。ふ。男。
 と。梵。語。ふ。又。と。云。女。と。梵。語。ふ。又。又。と。云。是。ふ。よ。く。觀。る。時。は。男。女。の。梵。語。の。一。つ。ふ。く。女。
 人。よ。い。し。とい。ふ。一。點。と。加。え。し。の。ミ。あ。の。し。点。の。じ。も。通。用。し。く。是。を。災。禍。の。点。と。云。又。妄。想。
 嫉。妬。の。点。と。も。云。具。よ。い。字。義。ふ。見。え。さ。り。有。如。此。者。八。才。ふ。あ。り。ける。龍。女。が。法。華。の。諸。法。實。相。
 の。大。旨。と。了。得。し。か。ば。一。切。衆。生。悉。有。佛。性。龍。女。も。佛。も。差。別。なく。凡。夫。も。佛。煩惱。も。菩提。妄。相。

も實相。澁柿も甘乾。善惡の不二。邪正も一貫。迷へばこそふ隔あり。と了達する緯の證據ふ。
 渠が心裏の明鏡と釋尊の嚮せしを。如意寶珠と進らるる。と經文の説さる也。摠く言語
 は演難きと注せんと欲するよ。心開意解と云義あり。叔釋尊の領さく。龍女は印可を給ふ
 試。逆寶珠と受給ふと。經文の説さるのミ。是。心。開。意。解。あり。登。時。龍。女。の。角。折。き。さ。り。女。人
 の。角。の。甚。度。あ。る。もの。が。煩。惱。妄。相。嫉。妬。執。念。愛。惜。の。心。則。是。也。此。五。欲。を。守。義。ふ。當。き。ば。彼
 し。点。と。あ。ま。る。也。こ。の。し。点。と。取。て。見。き。ば。便。是。又。と。さ。と。あ。る。所。云。男。子。の。梵。語。ふ。く。逆。變。成
 男子の義也。又と無垢と釋せるあり。大日經疏第九ふ由るよ。又とい無也。さの塵垢也。略
 なくいへば。即垢也。さればこそ無垢世界へ。成道佛果を遂さるあり。南方に果徳と標し。無
 垢世界の男子より。即無垢執心也。然るに心の迷ひふく。女人の即女人より。男子も亦
 女人の同し。形體ふよりて約し。名義ふのあらむか。よりて新婆沙論は。劫初の時の男
 女の形相の異なる事ありと説き。涅槃經(第九)の菩薩品。如來の常住佛性と知る
 者の。女人も男子と名づく。と説き。かまれば其形相こそ。男女とく己まじも。心のなど。隔

あるべき。女人成佛疑ひふし。と説給ひしを今こゝに熟思ひ合まき。親と良人の仇敵を相撃んと文辭を損ぐ。今より武更ふ名と揚べた。你の變成男子也。まきまころ風流の技の七点と除祛と。武藝の又と宗と一つべき。仇討の首途ふ。餞別取らせんと。おん臂近小措置さる。護身刀を取あげ。是れ是命婦丸と名づけさる。筑紫鍛冶の業物也。長一尺二寸ふし。鞆銀の猫と附さり。よそ一條院の愛させ給ひ。韓猫の故事も。命婦丸とい名づけさり。此逸物の猫とも。彼鼠川と撃捕んふ。勝むと云事ある可らむ。定ふ愛さしと。祝しと。御刀と賜えければ。秋布の速く。左右の手は受捧。感涙の進むと。覺えむ。そが儘刀と腰に帯。身の暇と請申えは。宿所へと。退出ける。有如之而又秋布の俊平と相計ふ。親と良人の七七の。追薦佛更の隔昨果一つ。御法の首途引更。修羅の巷へ旅衣。とつと。さきばかり。博多正延と相譚。奴婢等よ。僉身の暇と取ら。瀬川博多の兩屋鋪。正延。預け置。行装と整へ。其曉。俊平と。主従二人。位馴き。鎌倉と立出。萬里の逆旅。赴く。博多倍太郎。正延の。腰越送。送り行。遂に袂と分ちたり。

有然又秋布の。往方定ぬ。旅よりあまど。京師の究ぬ。繁華の地あり。且や彼處へ趣り。仇人の所在と探知る。手がかりのありもやせんと。俊平が云ふ。任。東海道と百十數里。野を過。山をうち踰。露宿。風小梳。押も習ぬ。草枕旅。寢の憂と身。知る草鞋。足と傷らま。秋。ぬ路傍の。草の葉と鮮血。深め。孤村。宿と。救うねて。夏の宵の月光。送られ。おほ行めり。秋布の容止の。いと美麗。さ。人目。ふ。あるとき。笠を深く。或とき。虫の垂衣。面と聚み。辛。道中。大約十日。あまり。恙なく。京師に至り。三條大橋の邊。客居。宿。投。日。毎。神社。佛閣。と。彼此。と。巡拜。仇人の所在。を。知。させ。給。へ。と。祈。さ。る。日。と。も。六。條。の。妓。院。四。條。の。勾。欄。行。客。聚。ふ。所。に。殊。更。小。眼。と。駐。て。仇。人。嘉。二。郎。に。似。さ。る。もの。ども。あり。や。か。と。襪。を。配。る。と。四。五。十。日。に。及。べ。ども。ろ。ま。う。と思。ふ。人。も。得。遭。む。か。これ。バ。浪。速。に。赴。き。亦。復。彼。地。と。索。ん。と。既。に。京。師。と。立。ける。朝。秋。布。の。日。比。信。ず。る。清。水。寺。の。觀。世。音。へ。今。一。と。び。請。づ。べ。く。八。幡。山。に。八。幡。宮。の。鶴。岡。の。大神。と。同。神。ふ。と。い。ま。ま。さ。き。バ。彼。神社。へ。も。參。ら。ま。ね。と。只。願。い。ふ。ふ。より。俊。平。も。その。意。



世に人の世は
 夢の如きもの
 時をば
 惜しむる
 こと
 五月
 節
 願
 言
 齋

十五
 東京
 三
 坂
 上

は任しく先清水へ参請を。素より急ぐぬ旅をまき。舞臺の繪馬とうち瞻めく。音羽の曝布の邊に到るふ。年尚弱き一箇の行客。伊勢度會の太神宮へ脱參せしもの。やあらむ。劔太麻と。ういふものと。挿ミとる。蒸芭を背に負ふて。栲の汚垢滌とる。脚絆の紐を。脛高に結び。偲。同行二人と寫しとる。菅笠と圓坐し。一件の曝布の邊りふをり。手ふ取る。慕縁柄杓を。うち仰を。曝布よきし寄せ。受はとまバ。頭と諷さ。音一冷と稱つ。三杓むりうち。飲ミか。がら。秋布を見りへり。女中の鎌倉人よくと。ねをる。おらん。今鎌倉よ。執權の御内人。おる。瀬川采女吉次の内室。博多秋布といふ才女あり。和漢の書籍と胸に藏め。女は稀なる。博識あるが。歌とさへよく諳。と灰は傳へ聞とる事あり。定めく知識は。あうと。ねをる。おらめ。といふ。主従駭さ。思ひをも目と注せ。と。おほ然らぬ。面色しとる。俊平呵々とうち笑ひ。否俺們的相摸。貧賤の躰士。京師見物。米つるの。鎌倉と。近くもあらぬ。風流の技。疎けき。去る才女のありや。あ。傳へ聞とる。更もあらを。といふ。北校冷咲ひ。う。の。虚言ふ。候。ん。おん身達と。はら。見る。村落の人。あ。ら。を。隠給ふ。遺恨

よこそといふ。俊平いよく呆ま。いう。は。疑ると。とも。鎌倉人。あ。ら。ぎ。ま。バ。別。い。ふ。べ。き。よ。も。あ。し。和。郎。の。又。何。國。人。よ。秋。布。と。や。ら。ん。と。諮。る。や。と。問。う。へ。さ。ま。う。ち。微。笑。ミ。吾。儕。が。故。郷。の。筑。紫。よ。一。農。家。の。小。所。也。伊。勢。參。宮。と。思。ひ。起。く。乞。食。を。あ。ら。が。ら。詰。と。る。う。へ。さ。ま。京。師。と。見。バ。や。と。く。名。所。古。迹。を。尋。つ。又。い。く。ば。く。の。日。と。過。せ。り。見。ら。る。と。如。く。年。も。弱。く。あ。ら。も。賤。し。吾。身。か。が。ら。書。視。る。事。と。好。る。甲。斐。ふ。或。は。故。事。物。の。義。理。を。穿。鑿。正。を。事。を。好。り。鎌。倉。近。く。あ。る。身。を。ら。バ。秋。布。ど。の。面。を。問。ま。ほ。し。さ。事。も。あ。ま。バ。思。ひ。う。ね。つ。と。云。云。と。おん身達。諸。と。り。といふ。俊平。駭。さ。そ。る。殊。勝。る。事。也。う。俺。們。の。兩。刀。を。人。か。み。小。帯。る。の。ミ。武。藝。の。支。に。些。バ。り。り。心。が。け。さ。ま。あ。ら。ね。ど。も。文。學。の。勸。學。院。の。雀。も。劣。り。さ。り。誘。退。ら。ん。と。秋。布。ふ。密。と。注。目。と。し。け。ま。バ。秋。布。の。や。こ。こ。ろ。と。得。く。先。よ。立。つ。主。従。二。人。清。水。坂。を。下。り。たり。か。く。く。そ。の。道。を。が。ら。俊。平。の。嘆。息。あ。つ。秋。布。は。聳。く。や。う。音。羽。の。瀧。の。ほ。と。り。あ。る。彼。脱。社。參。の。少。年。と。何。も。の。と。歎。見。給。ひ。々。ん。そ。の。貌。こ。そ。變。々。う。して。賤。者。ふ。似。と。ま。ど。も。色。白。ふ。く。眼。中。清。涼。く。物。の。い。ひ。ぎ。ま。進。止。一。辨。あ。る。べ。き。面。

魂たましひ。年才としの十六七じゅうろくにんもやあり々ん。渠かれの俺われ主従しゆうじゆうと定さだり。認かしる外そと々く一いち問もん試しさるもの
 小このあしぬ敷かいと訝いぶかし事ことふこそ。といふは秋布領あきふりやうに。吾儕わがらもまゝと思おもふる。肥ひの州しゅうを
 末すえの龍華たつはらふ。吾亡夫わがなきつとの弟あにある。瀬川浦せがわのうら二郎にらうといふ壯俊むかうとあり。鄙びの田舎いなかふ人とおきども。と
 さく文武ぶんぶの才さい闊くわたり。と倍太郎ばいだいりやう正延まさのぶぬの。物ものがさり。聞きさまじ。我亡夫わがなきつとと彼人かあひての素雙もとふた
 生なまふあり々まば。その面影おもかげを一点いっしやう違ちがひを鏡かがみ映うつる影かげの如ごとし。と定さだり。傳聞でんぶんさり。死しに
 る初はじり。脱社だつしゃ兒いと。も龍華たつはらありと聞きえ。浦二郎うらにらうぬ。ありまをと思おもひは。無視むしと
 る。その面影おもかげの一点いっしやうバりも。亡夫なきつと似にざりたり。うまき渠かれのたのづら。列人れつじんよ
 く吾夫わがつとの弟あにありさる也。さると和殿わだののいへるが如ごとく。俺われを認かしり。敷か中敷なかぬきあらね
 ども。平人たいびとふあらざり。善惡ぜんあく邪正じやせい。人の稟性しやう。表面かみかへふよれるものあらね。苟且かうしよも怪あやし
 人ひとふ。ものいひま。快こゝろようらむ。ゆくて。急いそぐんとて。一里いちりバり走りはししが。既もよ
 く疲勞つかれたり。間まも速はやかりふけま。主従しゆうじゆうやうやく心こゝろおちい。其處そこより又路またみちを急いそぐ頃ころ
 陸月りくげつの中流なかふ。晝ひるの暑あつせふ堪たへざれば。是首こゝろの並樹なみぎ。彼首かきこの木蔭こかげと屢しばしば慰なぐさひさりければ。既もよハ

幃はたへ詰あつる比ころ。日ひのえや西にしふ傾かたむきたり。かくて。今宵こよひ浪速なみはまで。ゆた著つかん事こと叶かひがさ。黄昏時たそがれとき
 造いたりお。何處いづこまき宿やどを討もむべ。とうち相譚あはらひつ。社頭しゃとうと退出でしゅつ。更さらふゆく事こと一里いちり許ばかり。こま
 より先途さきでの曠野のてんよ。群むれ遊あそぶ。人家ひとがやさ。とうくる程ほどふ。はや日の山ひのやまの陝は。没果いりはてく。十六
 日の月つぎの出いでたり。おは幾町いくぢやうゆき。今宵こよひの宿やどよあふや。ん斯しかうとあ。バ日ひの高たかくとも。
 八幡やわた留とまるべ。りし。悔くやし事ことと。けり。と主従しゆうじゆう頻しばしばふ臍はらと噓わひのミ。今いまさら八幡やわた返かへらん
 事ことも。却かへり。廻まわり。ぬ。いうようせん。と思おもひ難かたは。後走あとほしると數町おやぢやうよ。但た見みま。前途さきでの
 茂林もりのの中うち。閃々あわくと。火ひの光ひかり。最も幽おほく顯あき。う。主従しゆうじゆう齊ひとし一いつ歡あはび。原采はらて彼處かこふ人家ひとがやあ
 り。とくゆた。宿やどと討もむと。歩あしの運はこびと急いそぐ。うの處ところに到いたる。見みま。樹色いけがきと締ひ縮ひぢり。と
 る。東面ひがしは橋はし小こある。木門きかどあり。乗のりの素樸まろを柱はしらよ。偏へん拍はつ茶ちやといふ。三さん大だい字じと彫ほり。とる。
 樟かの生なま化石かたの偏額へんがくを掲かげ。主従しゆうじゆうの月光つぎあかり。この光景あかりざまと熱視つらくみて。こ。田舎いなかの道場どうぢやうふら
 ん。女子むすめと留とまる。否いなと知しらね。左ひだりも右みぎもいひこしらへて。今宵こよひの宿やどりを討もむと。門戸もんこと頻しばしば
 ようち扣た々た。裏面うらより誰たれと應こたへ。同宿どうしやくの沙彌しやみあるべ。紙燭しそくと秉もり立た出いて。左ひだり右みぎふく

門と開らむ。間近く門口に立より。聞き見ると半胸バウリ。来まるもの口誰と問ふ。登
 時俊平進より。これハ八幡請へ。浪速へ行く行客あるが。思ひを路と貪りより。宿
 扱後まゝ難義に及べり。伴侶ハ一箇の女子あり。その某が妹ハ。弱き女子と道場へ留め
 がさく思ひ給ひ。よハ檐下ハ立曉もとも。露宿まるハ増よあらん。大慈大悲と垂給
 へ。と辭せよ。く憑むはあん。裡面ある僧ハこれと聞。霎時俟ね。といひかけて走り。興へ
 赴き。を。やうやくよ。い。で。来。つ。外面をさ。聞。き。行客達ハ物申さん。いのま。よ。い
 を菴主ハ告。よ。容進らせよ。と許さきさ。り。とくこ。か。さ。へ。といひう。々。角門と半開き。と
 秋布主従と裡面ハ入ら。め。手。ば。やく。門。戸。を。引。開。て。故。の。如。く。ハ。鎖。と。一。つ。と。叔。主。従。の。衆
 内を。一。つ。と。庫。裏。め。た。さ。る。處。ハ。到。り。て。誘。と。客。殿。へ。進。め。々。り。登。時。五。十。む。り。か。る。住。持
 の法師出迎へ。秋布主従ハ對ひ。い。ふ。や。う。ち。う。た。比。ハ。故。あり。と。相。識。る。もの。ハ。あ。ら。さ。き
 ハ。半。夜。さ。り。ど。も。止。宿。を。許。さ。せ。ま。う。の。あ。き。ど。も。客。人。ハ。軟。弱。と。伴。ふ。宿。扱。難。く。難。義。の。よ
 一。聞。々。バ。了。得。ハ。痛。ま。く。且。同。行。ハ。女。人。を。ま。き。ど。一。箇。ハ。武。士。よ。と。い。ま。れ。バ。憑。く。思。ふ。よ。

あり。と。枉。御。宿。と。仕。ぬ。さ。バ。弱。く。美。し。た。女。人。を。精。舍。ハ。留。ん。と。後。聞。も。影。護。一。背。門。の
 方。ハ。禰。小。さ。る。一。棟。の。空。房。あり。煤。と。塵。埃。ハ。鬱。悒。あ。ら。ん。が。今。宵。ハ。其。處。ハ。曉。一。給。へ。ま。う。ま。ど
 も。時。さ。ほ。早。う。り。見。給。ふ。如。く。貧。院。よ。堂。宇。頽。破。ハ。及。び。う。ら。バ。進。る。物。も。さ。一。割。麥。粥。と
 焚。せん。ふ。そ。ま。ふ。く。饑。と。疲。ぎ。給。へ。といひ。慰。る。あ。る。ハ。態。ハ。俊。平。ふ。か。く。感。佩。ま。く。慈。悲。善。根
 と。宗。と。一。給。ふ。活。善。薩。ハ。あ。ら。ざ。り。せ。バ。然。る。款。待。ハ。遭。ひ。が。さ。う。ら。ん。を。佛。縁。あり。と。佛。地。ハ
 宿。ま。し。こ。ま。俺。們。が。幸。ひ。ハ。就。ハ。問。ま。ほ。し。う。る。ハ。相。識。る。もの。ハ。あ。ら。ざ。ま。バ。半。夜。も。止。宿。を。許
 さ。ひ。ど。某。が。武。士。あ。る。と。も。く。枉。一。夜。を。曉。さ。せ。給。ふ。と。宣。い。せ。し。る。ま。う。得。が。さ。一。甚。麼。さ
 る。所。以。の。あ。る。と。ふ。や。と。問。へ。バ。住。持。ハ。微。笑。て。その。不。審。こ。を。理。り。な。れ。當。庵。ハ。念。佛。堂。ふ。こ。こ
 の。地。と。偏。栢。林。と。い。へ。り。擅。越。講。中。居。多。あり。一。試。叢。ハ。太。宰。の。經。高。が。逆。亂。の。聞。え。あり。よ。り
 人。の。心。の。安。う。ら。ね。バ。諸。擅。講。衆。も。離。れ。さ。り。これ。よ。よ。目。今。ハ。貧。道。と。只。一。箇。あ。る。徒。弟。の。ミ
 荒。さ。る。堂。宇。と。守。ま。り。差。さ。る。物。を。な。け。れ。ど。も。近。曾。強。盜。處。々。ハ。起。る。人。を。害。し。物。を。略。る。風
 聲。既。ハ。隱。き。あ。り。これ。よ。よ。下。晡。より。門。戸。と。い。やく。鎖。固。く。相。識。な。ら。ね。バ。止。宿。を。許。さ。む。

然れどもおん身の武士おきば、撃劔拳法は長給いん。萬一一つ惡黨が宵略ふうち入るとあらば、暗號の土罫と鳴らまべ。當下おん身起出く。強盜等と擊留給いぬ。只己が幸ひのミあらむ。この近村の患を除く。功德のさしも莫大あらん。よりおん身が武士ある故。いと憑しく思ふといへり。も一爾るとのあらむとも。今宵むうりを貧道師弟も、枕と高く購るべ々れバ。打火の報ひは一錢も、望一うろを候と。いと正首ふ説論せば、秋布は駭然と側聞しつ。外視もふらず。俊平頻に感激して。いと巨細ある教解にて一時の疑惑を散したり。現人家速きこゝらでは。心細さも一入ならん。しからは今宵はいざとくして。とさく用心すべけれ。といふに住持は歡びて。とくく粥をまゐらせよ。と聲高やかに呼立れば、地爐に蒼紫折燒て、炊ぎに隙なき件の沙彌は、二前の麥粥ともて来つ。秋布主従に薦たる。あはせ物には糞糞漬の、舊し茄子も無色界、縁なき折敷も、元たる枕も。時に取ては百味の飲食。主従は箸を揚て。快く飲食一つ、淺かぬ管待の。よろこびと速て己ざれば、住持は差たる面色にて、客人達は聲音の坂東訛と聞ゆれば、鍾倉などの人にやあらん繁華なる地の人さまに。

汚穢く味なき麥粥と薦るの相應しからねど、辭語にいふ。なき袖の振りがさたというをいせん。然きども旅のをうゝたものよ。かゝる夏も後々には、夜話の一つになりぬべし。夜にはや夜中とればしきに。ゆれて購らせ給へかし。といふに主従歡びて。立まくすると、弟子の沙彌は、且くまたせ給へかし。と禁てまづ蒲團二つに、枕とり添速しく、背門の空房にもてゆきつ。忽地にかへり来て。いといひがたきとなれど、俺們とても蚊帳はなし。されどもこの地に蚊は稀也。嫌せ給ふともやと思へば。火盆と蟲遣草に、焯兒も添て彼處に措り。いざく、案内を仕らん。此方へ来ませ。と紙燭としつ。身を起しつ、先に立ば。秋布も俊平も其を勞ひつ。住持には、告辭一つ。覺束なくも、背門の空房に赴きけり。さる程に。その夜も既に更闌て。丑三ごろにやあらんずらん。菴のうたに土罫うち鳴らして。盜賊入りぬ。と叫びつ。追ひつ追る、足音の手に拿る如く聞はしかば。秋布とは間と隔し、俊平岸破と起揚りて。後室(秋布といふ)覺させ給ひしか。只今菴に強盜の。入りたりと覺たり。菴主に約せし事もあれば。某は走向ひて。立地に殺奔して。止宿の報ひますべければ。裡面より戸とよく閉

籠く。側杖殴れ給ふふ。といへば秋布も身と起し。己と心得ぬ所行ありとも。大吏の前の小事。賊の多少の知りながら。早くと懲給ふふ。とこころと附まば領さく。そをこころ得候へども。然ればとて阿容く。と。外ふや見らるべた。這奴等何程の事歟あるべた。いでくといひながら。刀と取り腰に跨へ。走りて巷に逃げ。縁頬のほとりより。狼狽騒ぐ。沙彌ふあひぬ。賊を什麼と諮る。沙彌の怖る聲。客入敷。遅る。師の坊には。郷らま。物多く略られさり。されども賊の一人ふ。昔門のうへ。只今ゆきぬ。籬笆と。いまだ踰べうらむ。追蒐討留給ひを。といふと俊平聞あへむ。こころ得たり。と縁頬より。走下し引返し。昔門の方へ赴く。沙彌も後方へ従ひ来つ。其處ふやあらん。彼處からんといふ。俊平いよく進み。空房の昔に到ると。死。釣索は足を纏き。忽撲地と輾び。物陰に懸き居る。一箇の惡僧走り出。素破。盜兒ごさんふれ。といふより。えやく捕へ。起んとすると。起しも立む。えや。犇々と縛めたり。俊平驚き且怒りて。己まは盜賊からむ。甲夜ふ宿し。旅宿へ。人違し。後悔を。と教團ながら月光ふ。これを縛る人

と見れば。是則巷主の僧。俊平いよく駭き。聖僧狂亂を給ひ。歟。これに甲夜の旅客。賊といゆる。覺をあらむ。といへせもあへむ。住持の惡僧。呵々と冷笑。この期に及。陳むるや。汝が外に強盜。骨と拉ぎ。責問を。いうて。うの實と吐くべき。此方へ来よ。と引立て。庫裡の柱に撃ざけり。その間。惡沙彌の昔門の空房。走りゆきて。秋布に報るや。同行の旅人の賊と撃留給ひ。うども。その身も深痕を負ひ給ひぬ。疾ゆき。見給ひを。といふ。秋布駭き。走り出つ。共侶。ゆくといまどいく。くふらむ。又釣索に絡き。怒地。輾轉と。惡沙彌透さを押著。ある何する。と叫ぶとも。聴うて。好意のふや。ありある。腕を背へ。揉揚。思ひの儘。縛めて。引立来つ。俊平と。間一室を隔る。柱に楚と撃ざり。然るとして。秋布主従。いうて。罪小伏をべき。就中俊平の。惡僧師弟と罵る。つ。縛の索と斷んとて。踊揚り。頻りに狂ふて。己ざりけむ。住持の惡僧。冷笑ひて。這奴。い。ばう。狂ふとも。大索と。縛さむ。彌勒の世まで。斷離る。と。か。縦。汝等争ふて。盜賊からむと。陳むるとも。己が袈裟法衣と。金三兩と。正しく。竊略られ。論より。證據とい

ふ事あり。えやく彼奴が行業と。もく来く見せや。といてせせば。惡沙彌空房へ走りゆたぐ。
 俊平が行業と。小脇は抱きくうへり来つ。中結解くうち開けば。油紙は包まざる。一通の書
 状あり。こまらるをばよくも見せ。この他兩箇の雨衣と。割籠と被替の衣もありけり。うが問よ
 ら出るものと。と見れば。圓金三兩と。新一た袈裟法衣あり。さまばこそ賊物と。えやく行
 業の内は隠しさり。こそあの賊婦が受とて。手むやくあざるは疑ひあり。思ふふこの男女
 二人の。名ある盜賊ふこそありはらめ。人ふ油斷とさせん爲。妍き女と伴ふる。彼も此も相
 須利へ。翌六波羅殿へ訴まうさば。首と刻らるべきものぞ。這奴が腰の重やうあるに。居多
 の金と隠し持る欺。二三百兩あらんとおぼし。又女が懐し隠しもてるに。短刀をらん。其も
 亦何處より。竊略するものよこそ。と兩箇の惡僧言語巧ま。まさしくとて嘲るよぞ。秋布
 も俊平も。彌采ま。倍怨ミく。いひ合さねど共し量るよ。這惡僧等の強盜ふりを。知らて
 伎倆に乗せられしに。武運は竭する過世の業報。かゝれば。今更悔恨むに。御は惡僧ふるべし。
 おもふよこの惡僧等の言と心を表裏し。いうてう六波羅殿へ訴ふべき。天あけぬ程ふ竊

は殺し。路費の財と略るをらめ。君の免許と被りし。仇討の宿志と得遂を。今強盜の手ふ死
 か。何人う亦如此く。と。舊里人よ言報ん。西國ふに浦二郎といふ。信とてしる親族あり。今
 茲彼地は赴く。訪んと思ひし。甲斐もなく。今よりいく世ふる寺の茂林ふ。骨と埋めやせん。
 見非もかた身の果よこそ。と思ふものうら主從齊一覺期を極め。争ひを屠所の羊と。身と
 かせば。後世こそ人の大事かれ。彌陀佛くくくと。心ふ唱る佛名も。音ふこそ立ね。秋蟬の長
 くらぬ世と啣言けり。うが中は俊平に。再こころし思ふやう。己が後室の美人あるふ。彼奴
 等これと殺まとも。後室さまと。バ色里へ。售らおほその身價を。略んと搦るともやあらん。継
 一旦活地獄へ。墮させ給ふとありとも。かん命ふごふ恙なく。神明佛陀の冥助よよりく。
 宿志を遂させ給ふべし。如右せようし。と。今さらよ。果敢なき事さへ頼ま。祈念と疑らま。
 主かもひ。千々よ心と推さたる。有斯之程は。惡僧等の。送ふ雲時再さ。商量既ふ整ひたん。
 いざとて。住持の惡僧に。板厨の戸と引開く。えやく取出を山刀。沙彌がもく来る合。磁の。磁桶
 小水を沃ぎ入る。と。住持のやとら引よせ。寢刃合し。月額の。毛と試つ。覺の。研味刃と

引提ぐ俊平が。わとりは立ち憎さげよ。やとれ盗兒よく聴けよ。六波羅殿へ幸もくゆきく。罪かかせんと思ひしうども。生身二人をえらくと。將くゆくと死に。途中の失脚煩しう。く得もあし。一途の支は頸より贈きばさわり賞もあらむ。覺期とせよ。と見ゆるす。刃の光りも秋布の吐嗟とばかり氣と悶。寄まくまれど。縛の絆の索は引留られず。腎居は控と。轉びつと聲と惜ぞ泣沈めば。磁桶播連る徒弟の惡僧。あふ罵や音高し。勿泣くと立より。宗拿縮る。真柱も現直うらぬ邪慳の手料理。既ふ住持の惡僧の刃と見りと揮揚。えや俊平が細頸と。打落さんとまる折うら。何の程ふり潜寓々ん。外面は立在る竊聞あさる捕手の武夫。従ふ夥兵五六名戸の節穴より闊さくをり。吐嗟や目今俊平の身首處を異はまつべ。危窮と猜せし件の武士。彼禁めよ。と焦燥さる。齊より速く夥兵等の板戸開放ちこみ入る。御談さふと呼り。手に十手をうち揮。住持と柱て俊平が。前後は立さる勢ひは不意と打きし兩箇の惡僧。こい乍麼奈何と駭。速く住持の刃と拿落し。沙彌の腰さへうち抜しけん。立まくあつと幾遍う。尻杵春てそ鞭びたる。登時件の武夫は進み入つと左見右見く。

住持は對ひて威儀正しく。和僧の本卷の主よ。某事の六波羅の北の正廳北條武藏助時村朝臣の御内人。海原澳進と呼るもの。近曾八幡山崎の邊ふ。強盜隠住るよし。その聞えあるより。某仰と奉。追捕の爲は潜て徘徊。夜かこの己を張る程。一湯と巧せん爲。夥兵は門戸と敲せし。裡面は絶く應なく。女子の哭聲聞えたり。こゝろ得がさく思ふふかん。樹色を推破ら。士卒齊一進み入り。卷の外面は近づた。裡面の容と竊聞せし。這男女兩人は。談り甲夜は宿りと討め。深夜は物と竊とさる。盜賊は紛まかたよし。彼處に在りて定うは知まり。あうらば翌六波羅殿へ。將くまあり斬まうし。憲斷は依るべきもの。然ると何や出家し似げなく。手をうら殺さんとせられし。佛の慈悲は齟齬をべく。猶且國家の法度は違へり。某等討らむ。こゝろ采つるこそ幸ひかれ。索附の儘遞與されよ。六波羅へ將かへり。情由を申あぐべし。者共えやく罪人等と。受捕むや。と焦燥たり。登時卷主の惡僧は。跪き頭と搔て。澳進がいふよし。うち聞かたり。いが。立んとあつる夥兵等を。速く推禁めて。各位且く等給へ。海原殿の教諭の趣き。承伏



せざるよあらねども命にかけて搦捕さる。巨盗と。この儘は各位へ通與て。狗骨折る鷹
 は捉らるるといふ辭語も劣りたり。各々のまづ選らせ給へ。天も明に當庵よ。將六波
 羅へ參るべし。といせも果を澳進の呵々と冷笑。原来卷主の賊を捕へる名聞と願
 る歟。その某が職分。然るに出家のいふに任。手を空く。選らんや。心もとなく思
 ねれば。卷主も今よ。我々と俱ふ。六波羅へまゐり給へ。些も猶豫すべからむ。といひま
 りいと困りたる。住持の沙彌と目と注。いひ辨よ。もかつの夜の脱方近くあり。たり。
 されば秋布主従。陳むる便宜と得ざり。か。主客邪正の問答を。うち聞かぬ。たり。が。
 俊平の思ひかねてや。澳進。うち對ひ。海原殿とやらん聞。召れよ。某等の盜賊ならむ。
 這法師等こそ盜賊おれ。その故の箇様。といひせも敢を澳進を眼と瞪。し。辨ふり立。
 這盜兒悍々。陳むれば。何と聞べ。夥兵達。この盜兒等が。贓物と皆携。率立
 るよ。といそが。後。立。出。去。夥兵。秋布俊平。素捕詰。追立。いと本意
 ちげ。目送り。兩惡僧。袈裟法衣。彼三兩の金さへ。も。行。禁め。齊。

歎息をとりける。畢竟秋布主従が。安危存亡甚廣ぞや。る。次の巻。辭分ると聽ねる。

松浦佐用媛石魂録後編卷之二終

